

# ボランティア息長く

東日本大震災の被災地で息の長いボランティア活動が続いている。全国社会福祉協議会(全社協)の集計によると、岩手、宮城、福島3県で8月までの半年間、毎月2万人台を維持。ピークだった昨年5月と比べると14%と激減したものの、今春の震災1年以降は再び盛り返している。活動の中心は、被災地のつながりに新しい生き方を見つけた中高年たちだ。

【竹内良和、写真も】

岩手県宮古市の山あいにある「かわいキャン」。盛岡市が昨夏、廃校を活用して開いたボランティアの活動拠点だ。約100人が無料で宿泊でき、食事は自炊。8月は若者で泊室が満杯の日もあったが、夏休みが終わると寂しくなった。

【写真】ボランティア活動に参加している。

## 被災3県 毎月2万人台

被災者の話し相手をしながらかいロプラクティックの技術を生かし、肩こりや腰痛のケアをする。高齢の女性が「体が軽くなった」と表情を崩す。

7年前に脳出血で倒れ、うまく歩けない。東京から9時間半の夜行バスで通い、3度目になる。宮古に始めてから、周囲に「表情が明るくなった」と言われる。「冗談で笑わせてくれる人さえいる。被災者の底力に元気をもらっているようです」

京都府福知山市の森脇稔彦さん(49)はレンタルDVD店の店長を辞め、5月の大型連休から滞在。「日本の一大事だ」と妻を説得し、環境を整えるまで1年

## 中高年「若い人の分も」

に流された家の跡地の草刈りを頼まれた。女性には逃げる時に夫の位牌を持ち出せず、自分を責めていた。いっそ耕して何か植えてはと、土にふるいをかけた。後日、その場所を通ると、赤い花が咲いていた。「おばあちゃんが降るころまで、宮古間と喜び合った。

ある時、高齢の女性 秋田市の棚谷潔さん



津波をかぶった畑の土から、丁寧にがれきを取り除く棚谷潔さん(中央)。ボランティア仲間との会話も弾む。岩手県山田町で6日

ボランティア、がんばる日

は市教委としても、いじめが背景にあったと認められていないか

5日午後1時15分ごろから同2時過ぎにかけ、11歳市小中居の公

## 「阪神」より減少緩やか

全社協によると、今年9月2日までに各地のボランティアセンターに登録し3県で活動した人は延べ110万人。昨年8月までの5カ月間は月10万人以上が続き、避難所の解消やがれきの撤去が進むと急減。寒さの厳しい翌冬は1万人台にまで落ち込んだが、その後は持ち直している。

立命館大の桜井政成准教授(ボランティア論)は「阪神大震災よりも減少のペースは緩やか」と指摘する。

(66)は半年以上の滞在中。昨年、会社を定年退職。四国で「お遍路」をして、泊めてもらった民家の女性に言われた「お返しなんか送らないで。困っていき若者を何人も見送って人たちに返して」初めてボランティアをや

## 毎日希望奨学金



東日本大震災で保護者を亡くした遺児を応援する「毎日希望奨学金」を受け付けています。

■郵便振替 毎日新聞東京社会事業団(00120・076498)。「奨学金」と明記してください。

■現金書留 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1の1の1、毎日新聞東京社会事業団「奨学金」係。

■銀行振り込み 三菱東京UFJ銀行東京営業部(普通0422292)。口座名は毎日新聞東京社会事業団希望奨学金。